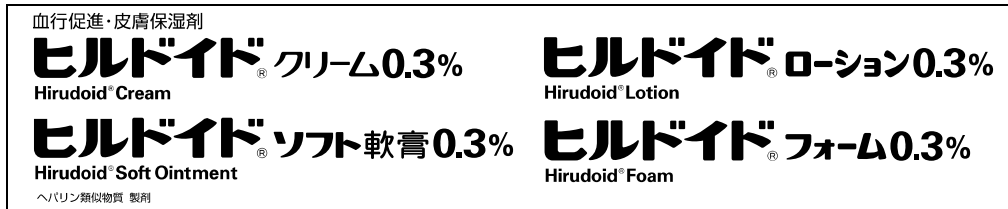


医薬品インタビューフォーム

日本病院薬剤師会の IF 記載要領 2008 に準拠して作成



剤 形	ヒルドイドクリーム 0.3% : クリーム剤 (水中油型の乳剤性基剤) ヒルドイドソフト軟膏 0.3% : クリーム剤 (油中水型の乳剤性基剤) ヒルドイドローション 0.3% : ローション剤 (水中油型の乳剤性基剤) ヒルドイドフォーム 0.3% : フォーム剤 (外用エアゾール剤)
製剤の規制区分	該当しない
規格・含量	1g 中 ヘパリン類似物質…………… 3.0 mg
一般名	和名:ヘパリン類似物質 洋名:Heparinoid
製造販売承認年月日 薬価基準収載・発売年月日	製造販売承認年月日 ヒルドイドクリーム 0.3% : 2008年10月15日 (販売名変更による) ヒルドイドソフト軟膏 0.3% : 2008年10月15日 (販売名変更による) ヒルドイドローション 0.3% : 2008年10月15日 (販売名変更による) ヒルドイドフォーム 0.3% : 2018年2月15日 薬価基準収載年月日 ヒルドイドクリーム 0.3% : 2008年12月19日 (販売名変更による) ヒルドイドソフト軟膏 0.3% : 2008年12月19日 (販売名変更による) ヒルドイドローション 0.3% : 2008年12月19日 (販売名変更による) ヒルドイドフォーム 0.3% : 2018年6月15日 発売年月日 ヒルドイドクリーム 0.3% : 1954年10月1日 ヒルドイドソフト軟膏 0.3% : 1996年7月8日 ヒルドイドローション 0.3% : 2001年7月9日 ヒルドイドフォーム 0.3% : 2018年9月13日
開発・製造販売(輸入)・提携・販売会社名	製造販売: マルホ株式会社
医薬情報担当者の連絡先	
問い合わせ窓口	マルホ株式会社 製品情報センター TEL: 0120-12-2834 受付時間: 9時30分~17時30分 (土、日、休日および当社休業日を除く) 医療関係者向けホームページ https://www.maruho.co.jp/medical/index.html

本 IF はヒルドイドクリーム 0.3%、ヒルドイドソフト軟膏 0.3%、ヒルドイドローション 0.3% : 2017年9月改訂、ヒルドイドフォーム 0.3%:2018年2月作成の添付文書の記載に基づき改訂した。最新の添付文書情報は、PMDA ホームページ「医薬品に関する情報」
<http://www.pmda.go.jp/safety/info-services/drugs/0001.html> にてご確認ください。

1. 医薬品インタビューフォーム作成の経緯

医療用医薬品の基本的な要約情報として医療用医薬品添付文書(以下、添付文書と略す)がある。医療現場で医師・薬剤師等の医療従事者が日常業務に必要な医薬品の適正使用情報を活用する際には、添付文書に記載された情報を裏付ける更に詳細な情報が必要な場合がある。

医療現場では、当該医薬品について製薬企業の医薬情報担当者等に情報の追加請求や質疑をして情報を補完して対処してきている。この際に必要な情報を網羅的に入手するための情報リストとしてインタビューフォームが誕生した。

昭和63年に日本病院薬剤師会(以下、日病薬と略す)学術第2小委員会が「医薬品インタビューフォーム」(以下、I Fと略す)の位置付け並びにI F記載様式を策定した。その後、医療従事者向け並びに患者向け医薬品情報ニーズの変化を受けて、平成10年9月に日病薬学術第3小委員会においてI F記載要領の改訂が行われた。

更に10年が経過した現在、医薬品情報の創り手である製薬企業、使い手である医療現場の薬剤師、双方にとって薬事・医療環境は大きく変化したことを受けて、平成20年9月に日病薬医薬情報委員会において新たなI F記載要領が策定された。

2. I Fとは

I Fは「添付文書等の情報を補完し、薬剤師等の医療従事者にとって日常業務に必要な、医薬品の品質管理のための情報、処方設計のための情報、調剤のための情報、医薬品の適正使用のための情報、薬学的な患者ケアのための情報等が集約された総合的な個別の医薬品解説書として、日病薬が記載要領を策定し、薬剤師等のために当該医薬品の製薬企業に作成及び提供を依頼している学術資料」と位置付けられる。

ただし、薬事法・製薬企業機密等に関わるもの、製薬企業の製剤努力を無効にするもの及び薬剤師自らが評価・判断・提供すべき事項等はI Fの記載事項とはならない。言い換えると、製薬企業から提供されたI Fは、薬剤師自らが評価・判断・臨床適応するとともに、必要な補完をするものという認識を持つことを前提としている。

[I Fの様式]

- ① 規格はA4判、横書きとし、原則として9ポイント以上の字体(図表は除く)で記載し、一色刷りとする。ただし、添付文書で赤枠・赤字を用いた場合には、電子媒体ではこれに従うものとする。
- ② I F記載要領に基づき作成し、各項目名はゴシック体で記載する。
- ③ 表紙の記載は統一し、表紙に続けて日病薬作成の「I F利用の手引きの概要」の全文を記載するものとし、2頁にまとめる。

[I Fの作成]

- ① I Fは原則として製剤の投与経路別(内用剤、注射剤、外用剤)に作成される。
- ② I Fに記載する項目及び配列は日病薬が策定したI F記載要領に準拠する。
- ③ 添付文書の内容を補完するとのI Fの主旨に沿って必要な情報が記載される。
- ④ 製薬企業の機密等に関するもの、製薬企業の製剤努力を無効にするもの及び薬剤師をはじめ医療従事者自らが評価・判断・提供すべき事項については記載されない。
- ⑤ 「医薬品インタビューフォーム記載要領2008」(以下、「I F記載要領2008」と略す)により作成されたI Fは、電子媒体での提供を基本とし、必要に応じて薬剤師が電子媒体(PDF)から印刷して使用する。企業での製本は必須ではない。

【I Fの発行】

- ① 「I F記載要領 2008」は、平成 21 年 4 月以降に承認された新医薬品から適用となる。
- ② 上記以外の医薬品については、「I F記載要領 2008」による作成・提供は強制されるものではない。
- ③ 使用上の注意の改訂、再審査結果又は再評価結果(臨床再評価)が公表された時点並びに適応症の拡大等がなされ、記載すべき内容が大きく変わった場合には I F が改訂される。

3. I Fの利用にあたって

「I F記載要領 2008」においては、従来の主にMRによる紙媒体での提供に替え、PDFファイルによる電子媒体での提供を基本としている。情報を利用する薬剤師は、電子媒体から印刷して利用することが原則で、医療機関でのIT環境によっては必要に応じてMRに印刷物での提供を依頼してもよいこととした。

電子媒体のI Fについては、PMDAホームページに掲載場所が設定されている。

製薬企業は「医薬品インタビューフォーム作成の手引き」に従って作成・提供するが、I Fの原点を踏まえ、医療現場に不足している情報やI F作成時に記載し難い情報等については製薬企業のMR等へのインタビューにより薬剤師等自らが内容を充実させ、I Fの利用性を高める必要がある。また、随時改訂される使用上の注意等に関する事項に関しては、I Fが改訂されるまでの間は、当該医薬品の製薬企業が提供する添付文書やお知らせ文書等、あるいは医薬品医療機器情報配信サービス等により薬剤師等自らが整備するとともに、I Fの使用にあたっては、最新の添付文書をPMDAホームページで確認する。

なお、適正使用や安全性の確保の点から記載されている「臨床成績」や「主な外国での発売状況」に関する項目等には承認事項に関わることもあり、その取扱いには十分留意すべきである。

4. 利用に際しての留意点

I Fを薬剤師等の日常業務において欠かすことができない医薬品情報源として活用して頂きたい。しかし、薬事法や医療用医薬品プロモーションコード等による規制により、製薬企業が医薬品情報として提供できる範囲には自ずと限界がある。I Fは日病薬の記載要領を受けて、当該医薬品の製薬企業が作成・提供するものであることから、記載・表現には制約を受けざるを得ないことを認識しておかなければならない。

また製薬企業は、I Fがあくまでも添付文書を補完する情報資材であり、今後インターネットでの公開等も踏まえ、薬事法上の広告規制に抵触しないよう留意し作成されていることを理解して情報を活用する必要がある。

(2008年9月)

目次

I.概要に関する項目	1	4.分 布	12
1.開発の経緯	1	5.代 謝	12
2.製品の治療学的・製剤学的特性	1	6.排 泄	13
7.透析等による除去率	13		
II.名称に関する項目	2	VIII.安全性(使用上の注意等)に関する項目	14
1.販売名	2	1.警告内容とその理由	14
2.一般名	2	2.禁忌内容とその理由(原則禁忌を含む)	14
3.構造式又は示性式	2	3.効能又は効果に関連する使用上の注意とその理由	14
4.分子式及び分子量	2	4.用法及び用量に関連する使用上の注意とその理由	14
5.化学名(命名法)	2	5.慎重投与内容とその理由	14
6.慣用名、別名、略号、記号番号	2	6.重要な基本的注意とその理由及び処置方法	14
7.CAS 登録番号	2	7.相互作用	14
III.有効成分に関する項目	3	8.副作用	14
1.物理化学的性質	3	9.高齢者への投与	16
2.有効成分の各種条件下における安定性	3	10.妊婦、産婦、授乳婦等への投与	16
3.有効成分の確認試験法	3	11.小児等への投与	16
4.有効成分の定量法	3	12.臨床検査結果に及ぼす影響	16
IV.製剤に関する項目	4	13.過量投与	16
1.剤形	4	14.適用上の注意	16
2.製剤の組成	4	15.その他の注意	16
3.用時溶解して使用する製剤の調製法	5	16.その他	16
4.懸濁剤、乳剤の分散性に対する注意	5	IX.非臨床試験に関する項目	17
5.製剤の各種条件下における安定性	5	1.薬理試験	17
6.溶解後の安定性	6	2.毒性試験	17
7.他剤との配合変化(物理化学的変化)	6	X.管理的事項に関する項目	19
8.溶出性	6	1.規制区分	19
9.生物学的試験法	6	2.有効期間又は使用期限	19
10.製剤中の有効成分の確認試験法	6	3.貯法・保存条件	19
11.製剤中の有効成分の定量法	6	4.薬剤取扱い上の注意点	19
12.力価	6	5.承認条件等	19
13.混入する可能性のある夾雑物	6	6.包装	20
14.治療上注意が必要な容器に関する情報	6	7.容器の材質	20
15.刺激性	6	8.同一成分・同効薬	20
16.その他	7	9.国際誕生年月日	20
V.治療に関する項目	8	10.製造販売承認年月日及び承認番号	20
1.効能又は効果	8	11.薬価基準収載年月日	21
2.用法及び用量	8	12.効能又は効果追加、用法及び用量変更追加等の年月日及びその内容	21
3.臨床成績	8	13.再審査結果、再評価結果公表年月日及びその内容	21
VI.薬効薬理に関する項目	10	14.再審査期間	21
1.薬理的に関連ある化合物又は化合物群	10	15.投薬期間制限医薬品に関する情報	21
2.薬理作用	10	16.各種コード	21
VII.薬物動態に関する項目	11	17.保険給付上の注意	21
1.血中濃度の推移・測定法	11		
2.薬物速度論的パラメータ	11		
3.吸 収	12		

X I.文 献.....	22
1.引用文献.....	22
2.その他の参考文献.....	23
X II.参考資料.....	24
1.主な外国での発売状況.....	24
2.海外における臨床支援情報	24
X III.備考.....	25

I. 概要に関する項目

1. 開発の経緯

ヘパリン類似物質は、ドイツのルイトポルド・ウエルク製薬会社で創製されたムコ多糖の多硫酸化エステルで、D-グルクロン酸とN-アセチル-D-ガラクトサミンからなる二糖を反復単位とする多糖体をSO₃⁻で多硫酸化したものである。その構造中に硫酸基、カルボキシル基、水酸基などの多くの親水基を持ち、高い保湿能を有する。

このヘパリン類似物質を有効成分とするヒルドイドクリーム0.3%は、ドイツ国内では1949年に表在性静脈炎、血栓症、癒痕形成の改善などを効能として発売され、日本国内では1954年10月にマルホ株式会社より発売された。1974年10月には再評価指定され、ヒルドイドクリーム0.3%の有効性及び安全性について確認された（再評価結果その15：1979年2月）。

その後、実験的乾燥皮膚モデル（モルモット）に対して角質水分保持増強作用を有することが実証され、臨床試験により乾燥性皮膚疾患に対する有用性が認められた。このことから、1988年9月に「皮脂欠乏症」をヒルドイドクリーム0.3%の効能効果として申請し、1990年12月に承認され、皮膚科等において幅広く使用されるようになった。

ヒルドイドクリーム0.3%の剤形追加品目として、1996年2月に良好な展延性及び被覆性を有するクリーム剤としてヒルドイドソフト軟膏0.3%、2001年2月に被髪頭部への適用に優れたローション剤としてヒルドイドローション0.3%、2018年2月に広範な患部に素早く塗布できる、容器から泡状に噴出するフォーム剤（外用エアゾール剤）としてヒルドイドフォーム0.3%が承認された。

2. 製品の治療学的・製剤学的特性

1. 持続性のある高い保湿能を有する。(健康成人、モルモット)(10頁参照)
2. 血行促進作用を有する。(ウサギ)(10頁参照)
3. 皮脂欠乏症、進行性指掌角皮症等に有用である。(8頁参照)
4. 以下の4製剤があり、使用部位や季節等に応じて使い分けることができる。
 - ・ヒルドイドクリーム0.3%：良好な展延性を有するクリーム剤（水中油型の乳剤性基剤）である。
 - ・ヒルドイドソフト軟膏0.3%：良好な展延性及び被覆性を有するクリーム剤（油中水型の乳剤性基剤）である。
 - ・ヒルドイドローション0.3%：展延性に優れ、広範な患部に使用しやすいローション剤（水中油型の乳剤性基剤）である。
 - ・ヒルドイドフォーム0.3%：高い展延性を有し、広範な患部に素早く塗布できる、容器から噴出した後に白色の泡となるフォーム剤である。
5. ヒルドイドクリーム0.3%は、総投与症例2471例中、23例(0.93%)に副作用が認められた。
(効能追加時)(14～15頁参照)
ヒルドイドソフト軟膏0.3%は、総投与症例119例中、副作用は認められなかった。
(承認時)(14～15頁参照)
ヒルドイドローション0.3%は、総投与症例121例中、副作用は認められなかった。
(承認時)(14～15頁参照)
ヒルドイドフォーム0.3%は、総投与症例60例中、1例(1.67%)に副作用が認められた。
(承認時)(14～15頁参照)

Ⅱ. 名称に関する項目

1. 販売名

(1) 和名

ヒルドイド[®]クリーム 0.3%
ヒルドイド[®]ソフト軟膏 0.3%
ヒルドイド[®]ローション 0.3%
ヒルドイド[®]フォーム 0.3%

(2) 洋名

Hirudoid[®] Cream
Hirudoid[®] Soft Ointment
Hirudoid[®] Lotion
Hirudoid[®] Foam

(3) 名称の由来

ドイツ語の Hirudo(蛭属)と～oid(～の様なもの)を組み合わせたものである

2. 一般名

(1) 和名(命名法)

ヘパリン類似物質

(2) 洋名(命名法)

Heparinoid

(3) ステム

不明

3. 構造式又は示性式

該当しない

4. 分子式及び分子量

該当しない

5. 化学名(命名法)

該当しない

6. 慣用名、別名、略号、記号番号

ヒルドイドクリーム 0.3% : なし
ヒルドイドソフト軟膏 0.3% : M-1030 (開発番号)
ヒルドイドローション 0.3% : M105101 (開発番号)
ヒルドイドフォーム 0.3% : M118102 (開発番号)

7. CAS 登録番号

登録されていない

Ⅲ. 有効成分に関する項目

1. 物理化学的性質

(1) 外観・性状

帯黄白色の無晶性の粉末で、においはなく、味はわずかに苦い。

(2) 溶解性

水に溶けやすく、メタノール、エタノール(95)、アセトン又は1-ブタノールにほとんど溶けない。

(3) 吸湿性

該当資料なし

(4) 融点(分解点)、沸点、凝固点

該当資料なし

(5) 酸塩基解離定数

該当資料なし

(6) 分配係数

該当資料なし

(7) その他の主な示性値

旋光度 $[\alpha]_D^{20}$: $-11.7 \sim -14.7^\circ$ (乾燥後、2g、水、20mL、100mm)

水溶液(1→20)のpHは5.3~7.6である。

2. 有効成分の各種条件下における安定性

該当資料なし

3. 有効成分の確認試験法

日本薬局方外医薬品規格 2002「ヘパリン類似物質」の確認試験による

4. 有効成分の定量法

日本薬局方外医薬品規格 2002「ヘパリン類似物質」の定量法による

IV. 製剤に関する項目

1. 剤形

(1) 投与経路

経皮

(2) 剤形の区別、規格及び性状

ヒルドイドクリーム 0.3% : 1g 中にヘパリン類似物質を 3.0mg 含有する白色のクリーム剤(水中油型の乳剤性基剤)で、わずかに特異なおいがある。

ヒルドイドソフト軟膏 0.3%:1g 中にヘパリン類似物質を 3.0mg 含有する白色のクリーム剤(油中水型の乳剤性基剤)で、わずかに特異なおいがある。

ヒルドイドローション 0.3%:1g 中にヘパリン類似物質を 3.0mg 含有する白色のローション剤(水中油型の乳剤性基剤)で、わずかに特異なおいがある。

ヒルドイドフォーム 0.3% : 原液 1g 中にヘパリン類似物質を 3.0mg 含有し、噴出するとき、白色のフォーム剤となる。

(3) 製剤の物性

該当資料なし

(4) 識別コード

なし

(5) pH、浸透圧比、粘度、比重、安定な pH 域等

該当資料なし

(6) 無菌の有無

無菌製剤ではない

2. 製剤の組成

(1) 有効成分(活性成分)の含量

ヒルドイドクリーム 0.3%、ヒルドイドソフト軟膏 0.3%、ヒルドイドローション 0.3% :
1g 中、ヘパリン類似物質を 3.0mg (0.3%) 含有
ヒルドイドフォーム 0.3% : 原液 1g 中、ヘパリン類似物質を 3.0mg (0.3%) 含有

(2) 添加物

ヒルドイドクリーム 0.3% : グリセリン、ステアリン酸、水酸化カリウム、白色ワセリン、ラノリンアルコール、セトステアリルアルコール、セトステアリルアルコール・セトステアリル硫酸ナトリウム混合物、ミリスチルアルコール、パラオキシ安息香酸メチル、パラオキシ安息香酸プロピル、イソプロパノール

ヒルドイドソフト軟膏 0.3% : グリセリン、スクワラン、軽質流動パラフィン、セレシン、白色ワセリン、サラシミツロウ、グリセリン脂肪酸エステル、ジブチルヒドロキシトルエン、エドト酸ナトリウム水和物、パラオキシ安息香酸メチル、パラオキシ安息香酸プロピル

ヒルドイドローション 0.3% : グリセリン、白色ワセリン、スクワラン、セタノール、還元ラノリン、セトマクロゴール 1000、モノステアリン酸グリセリン、パラオキシ安息香酸エチル、パラオキシ安息香酸プロピル、カルボキシビニルポリマー、ジイソプロパノールアミン

ヒルドイドフォーム 0.3% : (原液) グリセリン、マクロゴール、ポリソルベート 65、ポリオキシエチレンベヘニルエーテル、パラオキシ安息香酸メチル、パラオキシ安息香酸プロピル、pH 調節剤 (噴霧剤) LPG

(3) 添付溶解液の組成及び容量
該当しない

3. 用時溶解して使用する製剤の調製法
該当しない

4. 懸濁剤、乳剤の分散性に対する注意
該当しない

5. 製剤の各種条件下における安定性

ヒルドイドクリーム 0.3% 旧製剤の安定性試験結果¹⁾

試験	保存条件 (実測値)	保存形態	保存期間	結果
長期保存試験	室温 (25~34℃、 24~85%RH)	ポリプロピレン製容器	42 カ月	明確な品質の変化なし

測定項目：性状、確認試験、定量法

ヒルドイドクリーム 0.3% 新製剤 (チモール削除) の安定性試験結果¹⁾

試験	保存条件	保存形態	保存期間	結果
加速試験	40℃/75%RH	ポリエチレン樹脂チューブ ポリプロピレン瓶	7 カ月	明確な品質の変化なし
相対比較試験	40℃/75%RH	ポリエチレン樹脂チューブ ポリプロピレン瓶	3 カ月	処方変更前後において 同等の安定性を有する ことが確認された

測定項目：性状、確認試験、定量法

ヒルドイドソフト軟膏 0.3%²⁾

試験	保存条件	保存形態	保存期間	結果
長期保存試験	25℃/60%RH	ポリエチレン製チューブ ポリプロピレン製容器	42 カ月	明確な品質の変化なし
加速試験	40℃/75%RH	ポリエチレン製チューブ ポリプロピレン製容器	7 カ月	明確な品質の変化なし

測定項目：性状、確認試験、定量法

ヒルドイドローション 0.3%³⁾

試験	保存条件	保存形態	保存期間	結果
長期保存試験	25℃/60%RH	ポリエチレン製容器	43 カ月	明確な品質の変化なし
加速試験	40℃/75%RH	ポリエチレン製容器	7 カ月	明確な品質の変化なし

測定項目：性状、確認試験、定量法

ヒルドイドフォーム 0.3%⁴⁾

試験	保存条件	保存形態	保存期間	結果
長期保存試験	25°C/60%RH	エアゾール容器	18 カ月	明確な品質の変化なし
加速試験	40°C	エアゾール容器	6 カ月	明確な品質の変化なし

測定項目：性状、確認試験、定量法

6. 溶解後の安定性

該当しない

7. 他剤との配合変化(物理化学的变化)

該当資料なし

8. 溶出性

該当しない

9. 生物学的試験法

該当しない

10. 製剤中の有効成分の確認試験法

トルイジンブルー溶液による呈色反応

11. 製剤中の有効成分の定量法

紫外可視吸光度測定法

12. 力価

該当しない

13. 混入する可能性のある夾雑物

なし

14. 治療上注意が必要な容器に関する情報

該当しない

15. 刺激性

ヒルドイドクリーム 0.3%

局所刺激性⁵⁾

ウサギを用いた皮膚刺激性試験及び眼粘膜刺激性試験の結果、いずれも刺激性は軽度であった。

ヒルドイドソフト軟膏 0.3%

局所刺激性^{6) 7)}

ウサギを用いた皮膚刺激性試験及び眼粘膜刺激性試験の結果、いずれも刺激性は軽度であった。また、モルモットを用いた皮膚累積刺激性試験の結果、刺激性は軽度で反復貼付による増強は認められなかった。さらに、モルモットを用いた皮膚光毒性試験の結果、光毒性は認められなかった。

皮膚刺激性試験⁸⁾

健康成人 31 名を対象とした貼付試験の結果、光過敏性及び皮膚刺激性は認められなかった。

ヒルドイドローション 0.3%

局所刺激性⁹⁾

ウサギを用いた眼粘膜一次刺激性試験の結果、刺激性は認められなかった。また、ウサギを用いた皮膚一次刺激性試験の結果、刺激性は軽度であった。さらに、モルモットを用いた皮膚累積刺激性試験の結果、刺激性は軽度で反復貼付による増強は認められなかった。モルモットを用いた皮膚光毒性試験の結果、光毒性は認められなかった。

皮膚刺激性試験¹⁰⁾

健康成人 30 名を対象とした貼付試験の結果、皮膚刺激性は低く、光蕁麻疹及び光毒性は認められなかった。

ヒルドイドフォーム 0.3%

皮膚刺激性試験¹¹⁾

健康成人 30 名を対象とした貼付試験の結果、皮膚刺激性は低く忍容性があり、臨床上問題となる光照射による皮膚反応は認められなかった。

16. その他

該当しない

V. 治療に関する項目

1. 効能又は効果

血栓性静脈炎(痔核を含む)、血行障害に基づく疼痛と炎症性疾患(注射後の硬結並びに疼痛)、凍瘡、肥厚性癬痕・ケロイドの治療と予防、進行性指掌角皮症、皮脂欠乏症、外傷(打撲、捻挫、挫傷)後の腫脹・血腫・腱鞘炎・筋肉痛・関節炎、筋性斜頸(乳児期)

2. 用法及び用量

ヒルドイドクリーム 0.3%、ヒルドイドソフト軟膏 0.3%

通常、1日1～数回適量を患部に塗擦又はガーゼ等にのぼして貼付する。

ヒルドイドローション 0.3%、ヒルドイドフォーム 0.3%

通常、1日1～数回適量を患部に塗布する。

3. 臨床成績

(1) 臨床データパッケージ(2009年4月以降承認品目)

該当しない

(2) 臨床効果

ヒルドイドクリーム 0.3%

効能追加時までに実施された国内総計 2192 例を対象とした、二重盲検比較試験¹²⁾を含む臨床試験における有効率は、次のとおりであった。

対象疾患名	有効率(%) [有効以上]
皮脂欠乏症	91.2 [259/284]
進行性指掌角皮症	71.6 [68/95]
凍瘡	90.8 [129/142]
肥厚性癬痕・ケロイド	75.5 [369/489]
血行障害に基づく疼痛と炎症性疾患	100 [8/8]
血栓性静脈炎	78.0 [71/91]
外傷後の腫脹・血腫・腱鞘炎・筋肉痛・関節炎	75.5 [508/673]
筋性斜頸	88.3 [362/410]

ヒルドイドソフト軟膏 0.3%

国内総計 119 例を対象とした臨床試験における改善率は、次のとおりであった¹³⁾¹⁴⁾。

対象疾患名	改善率(%) [改善以上]
皮脂欠乏症	95.0 [57/60]
進行性指掌角皮症	71.2 [42/59]

ヒルドイドローション 0.3%

国内総計 114 例を対象とした臨床試験における改善率は、次のとおりであった^{15)~17)}。

対象疾患名	改善率(%) [改善以上]
皮脂欠乏症	98.1 [53/54]
進行性指掌角皮症	85.2 [23/27]
肥厚性癬痕・ケロイド	66.7 [10/15]
外傷(捻挫、挫傷)	100 [18/18]

ヒルドイドフォーム 0.3%

皮脂欠乏症患者男女 60 例を対象に、ヒルドイドソフト軟膏 0.3%から本剤への切り替え後の有効性及び安全性の確認を目的に一般臨床試験を実施した。その結果、本剤に切り替えた後も治療効果は維持された¹⁸⁾。

(3) 臨床薬理試験：忍容性試験

該当資料なし

(4) 探索的試験：用量反応探索試験

該当資料なし

(5) 検証的試験

1) 無作為化並行用量反応試験

該当資料なし

2) 比較試験

該当資料なし

3) 安全性試験

該当資料なし

4) 患者・病態別試験

該当資料なし

(6) 治療的使用

1) 使用成績調査・特別調査・市販後臨床試験

該当資料なし

2) 承認条件として実施予定の内容又は実施した試験の概要

該当資料なし

VI. 薬効薬理に関する項目

1. 薬理的に関連ある化合物又は化合物群

コンドロイチン4-硫酸、コンドロイチン6-硫酸

2. 薬理作用

(1) 作用部位・作用機序

作用部位：皮膚、末梢血管、筋・筋膜、腱、関節等

作用機序：血液凝固抑制作用、血流量増加作用、血腫消退促進作用、角質水分保持増強作用、線維芽細胞増殖抑制作用を有する。

(2) 薬効を裏付ける試験成績

1) 臨床薬理試験（ヒルドイドフォーム 0.3%）

健康成人男性 20 例を対象に、前腕部にヒルドイドフォーム 0.3%とヒルドイドクリーム 0.3%を単回塗布し、角層水分量を経時的に測定した。両剤で角層水分量の変化量の曲線下面積(AUC_{0h}→10h)を算出し、統計解析を行った結果、角層水分量を指標とした臨床薬理試験において、両剤は同等であることが確認された¹⁹⁾。

2) 血液凝固抑制作用²⁰⁾²¹⁾

血液凝固時間を延長し、血液凝固抑制作用を示す。(ヒト、イヌ、ウサギ)

3) 血流量増加作用^{22)~24)}

水素クリアランス法による実験で、皮膚組織血流量の増加を認めた。(ウサギ)

4) 血腫消退促進作用²³⁾

実験的血腫の消退促進を認めた。(ウサギ)

5) 角質水分保持増強作用

皮膚に対する保湿効果を有し(ヒト)²⁵⁾、実験的乾燥性皮膚において角質水分保持増強作用を認めた²⁴⁾²⁶⁾。(モルモット)

6) 線維芽細胞増殖抑制作用²¹⁾²⁷⁾

組織癒着防止に関する実験で、線維芽細胞増殖の抑制を認めた。(ウサギ)

(3) 作用発現時間・持続時間

該当資料なし

VII. 薬物動態に関する項目

1. 血中濃度の推移・測定法

(1) 治療上有効な血中濃度

該当しない

(2) 最高血中濃度到達時間

該当資料なし

(3) 臨床試験で確認された血中濃度

ヒルドイドクリーム 0.3%、ヒルドイドソフト軟膏 0.3%、ヒルドイドローション 0.3% :

該当資料なし

ヒルドイドフォーム 0.3% :

健康成人男性 10 例を対象に、前腕部にヒルドイドフォーム 0.3%と標準製剤（ヒルドイドクリーム 0.3%）を単回塗布し、塗布 4 時間後における角層中薬物量を測定した。両剤の角層中薬物量の対数値の平均値の差の 90%信頼区間は $\log(0.70) \sim \log(1.43)$ の範囲内であり、両剤の生物学的同等性が確認された²⁸⁾。

表 角層中薬物量の要約統計量

	角層中薬物量 ($\mu\text{g}/2.54\text{cm}^2$)
ヒルドイドフォーム 0.3%	5.159 \pm 1.864
標準製剤（ヒルドイドクリーム 0.3%）	5.261 \pm 1.166

(平均値 \pm 標準偏差、n=10)

(4) 中毒域

該当資料なし

(5) 食事・併用薬の影響

該当資料なし

(6) 母集団（ポピュレーション）解析により判明した薬物体内動態変動要因

該当資料なし

2. 薬物速度論的パラメータ

(1) コンパートメントモデル

該当資料なし

(2) 吸収速度定数

該当資料なし

(3) バイオアベイラビリティ

該当資料なし

(4) 消失速度定数

該当資料なし

(5) クリアランス
該当資料なし

(6) 分布容積
該当資料なし

(7) 血漿蛋白結合率
該当資料なし

3. 吸 収

吸収部位：皮膚

皮膚への塗布により、1時間後に毛包部のメタクロマジーを認め、2時間後には真皮でもメタクロマジーを認めた²⁹⁾。

4. 分 布

(1) 血液－脳関門通過性
該当資料なし

(2) 血液－胎盤関門通過性
該当資料なし

(3) 乳汁への移行性
該当資料なし

(4) 髄液への移行性
該当資料なし

(5) その他の組織への移行性
該当資料なし

5. 代 謝

(1) 代謝部位及び代謝経路
該当資料なし

(2) 代謝に関与する酵素 (CYP450 等) の分子種
該当資料なし

(3) 初回通過効果の有無及びその割合
該当資料なし

(4) 代謝物の活性の有無及び比率
該当資料なし

(5) 活性代謝物の速度論的パラメータ
該当資料なし

6. 排 泄

(1) 排泄部位及び経路

該当資料なし

(2) 排泄率

該当資料なし

(3) 排泄速度

該当資料なし

7. 透析等による除去率

該当資料なし

Ⅷ. 安全性(使用上の注意等)に関する項目

1. 警告内容とその理由

該当しない

2. 禁忌内容とその理由(原則禁忌を含む)

- (1) 出血性血液疾患(血友病、血小板減少症、紫斑病等)のある患者〔血液凝固抑制作用を有し、出血を助長するおそれがある〕
- (2) 僅少な出血でも重大な結果を来すことが予想される患者〔血液凝固抑制作用を有し、出血を助長するおそれがある〕

3. 効能又は効果に関連する使用上の注意とその理由

該当しない

4. 用法及び用量に関連する使用上の注意とその理由

該当しない

5. 慎重投与内容とその理由

該当しない

6. 重要な基本的注意とその理由及び処置方法

該当しない

7. 相互作用

(1) 併用禁忌とその理由

該当しない

(2) 併用注意とその理由

該当しない

8. 副作用

(1) 副作用の概要

ヒルドイドクリーム 0.3%

総投与症例 2471 例中、23 例(0.93%)に副作用が認められ、主なものは皮膚炎 9 件(0.36%)、そう痒 8 件(0.32%)、発赤 5 件(0.20%)、発疹 4 件(0.16%)、潮紅 3 件(0.12%)等であった。(効能追加時)

ヒルドイドソフト軟膏 0.3%

総投与症例 119 例中、本剤による副作用は認められなかった。(承認時)

ヒルドイドローション 0.3%

総投与症例 121 例中、本剤による副作用は認められなかった。(承認時)

ヒルドイドフォーム 0.3%

皮脂欠乏症患者を対象とした一般臨床試験において、総投与症例 60 例中、1 例 2 件の副作用が認められた。その内訳は、そう痒症及び紅斑が各 1 件であった。(承認時)

(2) 重大な副作用と初期症状

該当しない

(3) その他の副作用

次のような症状があらわれた場合には、使用を中止するなど適切な処置を行うこと。		
	頻度不明	0.1～5%未満
過敏症	皮膚刺激感	皮膚炎、そう痒、発赤、発疹、潮紅等
皮膚 (投与部位)	紫斑	

(解説)「過敏症」の0.1～5%未満の項は、1979年2月の再評価結果に基づき記載。
皮膚刺激感、紫斑については、自発報告が集積されたため記載。

(4) 項目別副作用発現頻度及び臨床検査値異常一覧

1) 項目別副作用発現頻度

ヒルドイドクリーム0.3%効能追加時

調査症例数	2471	
発現例数 (発現率)	23 (0.93)	
発現件数 (発現率)	36 (1.30)	
皮膚 (投与部位)	皮膚炎	9 (0.36)
	そう痒	8 (0.32)
	発赤	5 (0.20)
	発疹・丘疹・皮疹	4 (0.16)
	潮紅	3 (0.12)
	湿疹	2 (0.08)
	刺激感	2 (0.08)
	紅斑	1 (0.04)
	分泌物増加	1 (0.04)
熱感	1 (0.04)	

ヒルドイドソフト軟膏0.3%、ヒルドイドローション0.3%承認時：臨床試験において副作用は認められなかった。

ヒルドイドフォーム0.3%承認時：皮脂欠乏症患者を対象とした一般臨床試験において、総投与症例60例中、1例(1.67%)の副作用が認められた。その内訳は、そう痒症及び紅斑が各1件(1.67%)であった。

2) ヒルドイドクリーム0.3%、ヒルドイドソフト軟膏0.3%、ヒルドイドローション0.3%、ヒルドイドフォーム0.3%：薬剤に起因する臨床検査値の異常変動は認められなかった。

(5) 基礎疾患、合併症、重症度及び手術の有無等背景別の副作用発現頻度

該当資料なし

(6) 薬物アレルギーに対する注意及び試験法

その他の副作用		
次のような症状があらわれた場合には、使用を中止するなど適切な処置を行うこと。		
	頻度不明	0.1～5%未満
過敏症	皮膚刺激感	皮膚炎、そう痒、発赤、発疹、潮紅等

試験法については該当資料なし

9. 高齢者への投与

該当資料なし

10. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与

妊娠中の投与に関する安全性は確立していない。

(解説) ヒルドイドクリーム 0.3%、ヒルドイドソフト軟膏 0.3%、ヒルドイドローション 0.3%の販売開始以来、本項記載は無かったが、これらの製剤を用いた臨床試験、使用成績調査等の安全性を検証できるデータが無いことから、2005年9月改訂において本項を追記。

11. 小児等への投与

該当資料なし

12. 臨床検査結果に及ぼす影響

該当資料なし

13. 過量投与

該当資料なし

14. 適用上の注意

ヒルドイドクリーム 0.3%、ヒルドイドソフト軟膏 0.3%、ヒルドイドローション 0.3%
投与部位：潰瘍、びらん面への直接塗擦又は塗布を避けること。
眼には使用しないこと。

ヒルドイドフォーム 0.3%
投与部位：潰瘍、びらん面への直接塗布を避けること。
眼には使用しないこと。

15. その他の注意

該当資料なし

16. その他

特になし

IX. 非臨床試験に関する項目

1. 薬理試験

(1) 薬効薬理試験(「VI. 薬効薬理に関する項目」参照)

(2) 副次的薬理試験

該当資料なし

(3) 安全性薬理試験

ウサギを用いて血液凝固系に及ぼす作用を検討した結果、凝固時間の延長が認められた²⁰⁾。

(4) その他の薬理試験

該当資料なし

2. 毒性試験

(1) 単回投与毒性試験³⁰⁾

LD₅₀ マウス(皮下) 雄 2000mg/kg、雌 2000mg/kg
ラット(皮下) 雄 500mg/kg、雌 750mg/kg

(2) 反復投与毒性試験

雌雄ラットに1ヵ月間皮下投与した結果、10及び20mg/kgでは皮下出血による膨隆以外の中毒症状は認められず、40mg/kg以上では体重増加の抑制、自発運動の抑制、歩行異常、四肢端・耳介の蒼白化、投与部位の皮下出血等が認められた³¹⁾。

雌雄ラットに6ヵ月間皮下投与した結果、5mg/kgでは異常は認められず、10mg/kg以上では皮下出血による膨隆、体重増加の抑制以外の症状は認められず、20mg/kg以上では自発運動の抑制、歩行異常、四肢端・耳介の蒼白化等が認められた³²⁾。

(3) 生殖発生毒性試験

該当資料なし

(4) その他の特殊毒性

抗原性³³⁾

ウサギを用いた沈降反応、間接凝集反応、全身・皮膚アナフィラキシー反応、Schultz-Dale反応、ラットを用いた皮膚アナフィラキシー反応、マウスを用いた皮膚アナフィラキシー反応のいずれの試験においても抗原性は認められなかった。

局所刺激性

ヒルドイドクリーム0.3%⁵⁾

ウサギを用いた皮膚刺激性試験及び眼粘膜刺激性試験の結果、いずれも刺激性は軽度であった。

ヒルドイドソフト軟膏0.3%⁶⁾⁷⁾

ウサギを用いた皮膚刺激性試験及び眼粘膜刺激性試験の結果、いずれも刺激性は軽度であった。また、モルモットを用いた皮膚累積刺激性試験の結果、刺激性は軽度で反復貼付による増強は認められなかった。さらに、モルモットを用いた皮膚光毒性試験の結果、光毒性は認められなかった。

ヒルドイドローション0.3%⁹⁾

ウサギを用いた眼粘膜一次刺激性試験の結果、刺激性は認められなかった。また、ウサギを用いた皮膚一次刺激性試験の結果、刺激性は軽度であった。さらに、モルモットを用いた皮膚累積刺激性試験の結果、刺激性は軽度で反復貼付による増強は認められなかった。モルモットを用いた皮膚光毒性試験の結果、光毒性は認められなかった。

皮膚感作性

ヒルドイドクリーム 0.3%³³⁾

モルモットを用いた皮膚感作性試験 (Maximization Test) の結果、感作性は認められなかった。

ヒルドイドソフト軟膏 0.3%⁷⁾

モルモットを用いた皮膚感作性試験 (Maximization Test) 及び皮膚光感作性試験 (Adjuvant and Strip Test) の結果、いずれも感作性は認められなかった。

ヒルドイドローション 0.3%⁹⁾

モルモットを用いた皮膚感作性試験 (Maximization Test) 及び皮膚光感作性試験 (Adjuvant and Strip Test) の結果、いずれも感作性は認められなかった。

変異原性³⁴⁾

微生物を用いた Rec-assay 及び復帰変異試験、培養細胞を用いた染色体異常誘発試験及びラット骨髄細胞を用いた染色体異常誘発試験の結果、変異原性は認められなかった。

X. 管理的事項に関する項目

1. 規制区分

製剤：ヒルドイドクリーム 0.3% 該当しない
ヒルドイドソフト軟膏 0.3% 該当しない
ヒルドイドローション 0.3% 該当しない
ヒルドイドフォーム 0.3% 該当しない
有効成分：ヘパリン類似物質 該当しない

2. 有効期間又は使用期限

ヒルドイドクリーム 0.3%、ヒルドイドソフト軟膏 0.3%
使用期限：3年6カ月(安定性試験結果に基づく)
ヒルドイドローション 0.3%
使用期限：3年(安定性試験結果に基づく)
ヒルドイドフォーム 0.3%
使用期限：2年6カ月(安定性試験結果に基づく)

3. 貯法・保存条件

室温保存

4. 薬剤取扱い上の注意点

(1) 薬局での取り扱いについて

該当しない

(2) 薬剤交付時の注意(患者等に留意すべき必須事項等)

「Ⅷ. 安全性(使用上の注意等)に関する項目」参照

[取扱い上の注意]

ヒルドイドクリーム 0.3%の瓶包装品は製剤中の水分が蒸発することがあるので、未使用時はキャップをすること

ヒルドイドフォーム 0.3%：

1. よく振ってから、使用すること。
2. 横向きや逆さまで使用しないこと。
3. 高圧ガス（LPG）を使用した可燃性の製品であり、危険なため、下記の注意を守ること。
 - 1) 炎や火気の近くで使用しないこと。
 - 2) 火気を使用している室内で大量に使用しないこと。
 - 3) 高温にすると破裂の危険があるため、直射日光の当たる所や火気等の近くなど温度が40℃以上となる所に置かないこと。
 - 4) 火の中に入れてないこと。
 - 5) 使い切って捨てること。

患者向けホームページ：<https://www.maruhco.jp/kanja/>

「皮膚などの病気に関する情報・皮膚の基礎知識・日常的な肌のケアについて」

5. 承認条件等

該当しない

6. 包装

- ヒルドイドクリーム 0.3%
 チューブ：25g×10、50g×10
 瓶：100g、500g
- ヒルドイドソフト軟膏 0.3%
 チューブ：25g×10、25g×50、50g×10、50g×50
 瓶：100g、500g
- ヒルドイドローション 0.3%
 25g×10、25g×50、50g×10、50g×50
- ヒルドイドフォーム 0.3%
 缶：原液 92g×10

7. 容器の材質

		容器	パッキン	キャップ
ヒルドイドクリーム 0.3%	チューブ	ポリエチレン	—	ポリプロピレン
	100g 瓶	ポリプロピレン	ポリプロピレン	ポリプロピレン
	500g 瓶	ポリプロピレン	ポリプロピレン	ポリプロピレン
ヒルドイドソフト軟膏 0.3%	チューブ	ポリエチレン	—	ポリプロピレン
	100g 瓶	ポリプロピレン	ポリプロピレン	ポリプロピレン
	500g 瓶	ポリプロピレン	ポリプロピレン	ポリプロピレン

	容器	中栓	キャップ
ヒルドイドローション 0.3%	ポリエチレン	ポリエチレン	ポリエチレン

	缶	ボタン	キャップ
ヒルドイドフォーム 0.3%	アルミニウム	ポリエチレン	ポリプロピレン

8. 同一成分・同効薬

- 同一成分薬：ヒルドイドゲル 0.3%
 同効薬：なし

9. 国際誕生年月日

不明

10. 製造販売承認年月日及び承認番号

- ヒルドイドクリーム 0.3%
 承認年月日：2008年10月15日(販売名変更による)
 承認番号：22000AMX02389000
 旧販売名「ヒルドイド」
 承認年月日：1958年8月8日
 承認番号：13327KUY07386000
- ヒルドイドソフト軟膏 0.3%
 承認年月日：2008年10月15日(販売名変更による)
 承認番号：22000AMX02390000
 旧販売名「ヒルドイドソフト」
 承認年月日：1996年2月1日
 承認番号：20800AMZ00098000

ヒルドイドローション 0.3%
 承認年月日：2008年10月15日(販売名変更による)
 承認番号：22000AMX02391000
 旧販売名「ヒルドイドローション」
 承認年月日：2001年2月14日
 承認番号：21300AMZ00099000
 ヒルドイドフォーム 0.3%
 承認年月日：2018年2月15日
 承認番号：23000AMX00232000

11. 薬価基準収載年月日

ヒルドイドクリーム 0.3% : 2008年12月19日
 旧販売名「ヒルドイド」: 1958年4月1日 経過措置期間満了: 2009年8月31日
 ヒルドイドソフト軟膏 0.3% : 2008年12月19日
 旧販売名「ヒルドイドソフト」: 1996年7月5日 経過措置期間満了: 2009年8月31日
 ヒルドイドローション 0.3% : 2008年12月19日
 旧販売名「ヒルドイドローション」: 2001年7月6日 経過措置期間満了: 2009年8月31日
 ヒルドイドフォーム 0.3% : 2018年6月15日

12. 効能又は効果追加、用法及び用量変更追加等の年月日及びその内容

ヒルドイドクリーム 0.3%
 効能・効果追加年月日：1990年12月18日
 内容：皮脂欠乏症

13. 再審査結果、再評価結果公表年月日及びその内容

ヒルドイドクリーム 0.3%
 再評価結果の公表：1979年2月2日
 内容：総合評価判定において「所要の措置をとることにより有用性が認められるもの（カテゴリー2）」と判定された。

14. 再審査期間

該当しない

15. 投薬期間制限医薬品に関する情報

本剤は、投与期間に関する制限は定められていない。

16. 各種コード

	HOT 番号	厚生労働省薬価基準 収載医薬品コード	レセプト電算コード
ヒルドイドクリーム 0.3%	108134301	3339950N1035	620009046
ヒルドイドソフト軟膏 0.3%	108138101	3339950M1137	620009048
ヒルドイドローション 0.3%	114182501	3339950Q1074	620009049
ヒルドイドフォーム 0.3%	126440101	3339950R1177	622644001

17. 保険給付上の注意

該当しない

X I. 文 献

1. 引用文献

- 1) 社内資料 : ヒルドイドクリーム 0.3% 安定性試験
- 2) 社内資料 : ヒルドイドソフト軟膏 0.3% 安定性試験
- 3) 社内資料 : ヒルドイドローション 0.3% 安定性試験
- 4) 社内資料 : ヒルドイドフォーム 0.3% 安定性試験
- 5) 信定政仁ら : 薬理と治療, 2(7), 1036(1974)
- 6) 平田篤由ら : 基礎と臨床, 30(3), 445(1996)
- 7) 武吉正博ら : 基礎と臨床, 30(3), 453(1996)
- 8) 川島 眞ら : 臨床医薬, 12(10), 2053(1996)
- 9) 井上健司ら : 薬理と治療, 29(4), 227(2001)
- 10) 川島 眞ら : 臨床医薬, 17(7), 1063(2001)
- 11) 川島 眞ら : 皮膚の科学, 16(5), 366(2017)
- 12) ヒルドイド研究班 : 臨床医薬, 4(10), 1903(1988)
- 13) 長島正治ら : 臨床医薬, 10(7), 1671(1994)
- 14) 原田昭太郎ら : 臨床医薬, 10(7), 1683(1994)
- 15) 原田昭太郎ら : 臨床医薬, 17(7), 1051(2001)
- 16) 大島良夫ら : 臨床医薬, 17(7), 1079(2001)
- 17) 山崎 誠ら : 臨床医薬, 17(7), 1071(2001)
- 18) 川島 眞ら : 皮膚の科学, 16(5), 356(2017)
- 19) 藤村昭夫ら : 臨床医薬, 34(2), 115(2018)
- 20) 石川浩一ら : 外科, 17(12), 849(1955)
- 21) 中安国裕 : 東京慈恵会医科大学雑誌, 76(2), 494(1961)
- 22) 前田誠二ら : 薬効薬理に関する社内資料(血流量増加作用)
- 23) 木戸裕子ら : 基礎と臨床, 30(3), 463(1996)
- 24) 土肥孝彰ら : 薬理と治療, 29(2), 127(2001)
- 25) 安藤隆夫ら : 日本化粧品科学会誌, 8(3), 246(1984)
- 26) 難波和彦 : 久留米医学会雑誌, 51(6), 407(1988)
- 27) 間狩 孝 : 日本外科宝函, 28(9), 3757(1959)
- 28) 藤村昭夫ら : 臨床医薬, 34(2), 109(2018)
- 29) 成田 稔、加庭信二 : 薬物療法, 9(12), 1579(1976)
- 30) 吉田 猛ら : 基礎と臨床, 17(8), 2539(1983)
- 31) 平川哲孝ら : 基礎と臨床, 18(10), 5249(1984)
- 32) 平川哲孝ら : 基礎と臨床, 18(10), 5266(1984)
- 33) 玉井敏夫ら : 基礎と臨床, 18(10), 5295(1984)

34) 堂ヶ崎知格ら：基礎と臨床, 18(10), 5304(1984)

2. その他の参考文献

X II. 参考資料

1. 主な外国での発売状況

本剤の有効成分であるヘパリン類似物質を含有した製剤（配合剤を除く）は各国で販売されており、海外での発売状況について以下の表に示す。

外国での販売状況

国名	販売名	国名	販売名
アルゼンチン	Fleboderma, Hirudoid	イタリア	Ateroid, Condral, Hirudoid, Matrix
オーストラリア	Hirudoid, Lasonil	オランダ	Hirudoid
オーストリア	Hemeran, Hirudoid	ノルウェー	Hirudoid
ベルギー	Hemeran, Hirudoid	ニュージーランド	Hirudoid, Lasonil
ブラジル	Hirudoid, Topcoid	ポルトガル	Hemeran, Hirudoid, Lasonil
チリ	Hirudoid	フィリピン	Hirudoid
中国	Hirudoid	ポーランド	Hirudoid
チェコ	Heparoid, Hirudoid	ウクライナ	Heparoid
デンマーク	Hirudoid	ロシア	Balaepan, Heparoid
フィンランド	Hirudoid	シンガポール	Hirudoid
ドイツ	Hirudoid	スペイン	Dinoven, Hirudoid
ギリシャ	Arteparon, Hemeran, Hirudoid, Lasonil N	スウェーデン	Hirudoid
香港	Hepacare, Hirudoid	スイス	Hemeran, Hirudoid
ハンガリー	Hirudoid	タイ	Hirudoid, Varidoid
インド	Hirudoid	トルコ	Hirudoid, Lasonil
インドネシア	Hirudoid	イギリス	Bruiseze, Hirudoid
ベネズエラ	Hirudoid		

資料) Martindale 38th edition. Alison B. 2014; 1401

なお本邦におけるヒルドイドクリーム 0.3%、ヒルドイドソフト軟膏 0.3%、ヒルドイドローション 0.3%、ヒルドイドフォーム 0.3%の効能・効果、用法・用量は以下のとおりである。(2018年2月時点)

効能・効果

血栓性静脈炎(痔核を含む)、血行障害に基づく疼痛と炎症性疾患(注射後の硬結並びに疼痛)、凍瘡、肥厚性癬痕・ケロイドの治療と予防、進行性指掌角皮症、皮脂欠乏症、外傷(打撲、捻挫、挫傷)後の腫脹・血腫・腱鞘炎・筋肉痛・関節炎、筋性斜頸(乳児期)

用法・用量

[ヒルドイドクリーム 0.3%、ヒルドイドソフト軟膏 0.3%]

通常、1日1～数回適量を患部に塗擦又はガーゼ等にのばして貼付する。

[ヒルドイドローション 0.3%、ヒルドイドフォーム 0.3%]

通常、1日1～数回適量を患部に塗布する。

2. 海外における臨床支援情報

該当資料なし

XⅢ. 備考

その他の関連資料